

## 現代英語に現れた小説に由来するメタファー (Ⅲ) 〈完結編〉

—メタファーとしての Sherlock Holmes; Dr. Jekyll and Mr. Hyde; Orwellian; Ahab—②

大西 博人

### 3. 『独裁者』のメタファー: Big Brother と Orwellian

中編小説『1984年』(*Nineteen Eighty-four*) は、英国の作家ジョージ・オーウェル (George Orwell) が1948年に完成し、1949年に出版された有名な全体主義社会の恐怖を描いた未来小説です。

この小説では、通常兵器によって絶えず局地戦を続けている3つの超大国のひとつオセアニアと呼ばれる現在のイギリスが舞台になっています。ここでは人間の行動はいかなる時間、いかなる場所においても「盗聴マイク」と「テレスクリーン」によって監視され、反政府思想は行動だけでなく心に抱いただけでも、思想警察によって摘発され拷問のすえに抹殺されてしまうのです。全体主義的独裁国家の頂点にあるのが、Big Brother (偉大なる兄弟) で絶対に過ちを犯さない全能の存在ですが、彼を見たものは誰もいないし実在か否かも不明なのです。

作者オーウェルの形容詞形 “Orwellian” は、個人生活の侵害や統制、過去の歪曲、裁判のない投獄や拷問を生み出す全体主義国家を表わすメタファーとして、現代英語のなかで現れています。語法頻度を示すサイト Ngram Viewer (<http://books.google.com/ngrams>) によると、この小説が出版された1949年より現在に至るまで、70年代と80年代半ばで小刻みな上昇する時期を除けば、急激な右肩上がりが見られます。これは Orwellian が「全体主義国家の出現」のメタファーとして定着していることを示しています。その言葉には全体主義国家に対する警告が含意されています。

On my way back to the hotel, I saw commuters being pushed onto a jam-packed trolley bus, not an uncommon sight in Beijing or Shanghai — or Tokyo. Instinctively, I took out my camera. Just as I

clicked the shutter, however, I was shoved from behind by a burly man in a blue suit. Oh, yes, my security tail. It was a rude reminder that Big Brother is on duty even on holidays. — *Time*, May 22, 1995, p. 29

これはメーデーに北朝鮮のピョンヤンで米国人記者が経験した出来事です。彼はらびどの日常生活をカメラに収めたとき、ずっと後をつけていた当局の監視員につかまったというのです。彼は休日でも「独裁国家権力機構が露骨にはたらいっている」ことを思い起こされたのです。この種のメタファーは北朝鮮の報道で頻繁に見られます。Big Brother は、北朝鮮が独裁国家だとすることを示すキーワードとなっているのです。

How will all this shake out? American immigration policy certainly won't become Orwellian; the country is too big, mobile and dependent on foreign visitors to become a menacing Big Brother. But it will become more vigilant. — *Newsweek*, November 12, 2001, p. 59

これはテロリストが不法移民を装いアメリカに入国することを阻止しようと不法移民対策を強化しようとすることについての報道です。アメリカの移民政策は「独裁国家的」にはならないし、アメリカは国土が広く社会的に流動的で、移民に多くを依存しているので「脅威を与える独裁国家」にはならないだろうと述べています。Big Brother と Orwellian の両方がメタファーとして現れています。

The subjects of the United Kingdom, birthplace of Western democracy, now resided in

an Orwellian world where their every movement was watched over by the eyes of the state. — Daniel Silva, *The Defector*, A Signet Book 2010, p. 26

これは小説の中でロンドンの犯罪防止対策についての意見です。ロンドン警視庁は犯罪対策として都心部に何千という隠しテレビカメラを設置したのです。その結果イギリスの国民 (subjects) は、西洋民主主義の発祥地にも関わらず、今やあらゆる動向が政府によって監視される「独裁国家的世界」に暮らすことになったと述べています。

Americans watched (and helped) the Soviet Union and its European empire collapse and watched (and helped) China change from a backward, dangerous Orwellian nation into a booming, much less Orwellian member of the global order. — *Time*, April 6, 2009, p. 32

アメリカはソ連が崩壊するのを、中国がより「独裁的」でなく「世界の常識に近づく」国家になるのを、見守り同時に手助けをしてきたとする報道です。旧ソ連もかつての中国は典型的な全体主義的独裁国家であったとする認識を Orwellian で端的に述べているのです。

筆者は1979年に文部省の教員海外派遣団の通訳としてソ連に1週間滞在したことがありました。ロシア人の英語が話せる公務員 (インターリスト) 通訳は、お酒の勢いで滞在最終日のホテルでのディナー後に自分の部屋にこないかと誘われ、彼の部屋に行きました。ホテルの部屋でいろいろ世間話をしようとしたのですが、彼はわれに返ったかのように黙り込んでしまいました。

しばらくして彼は紙に英語で、I'm afraid I can't talk. This room may be bugged. (この部屋は盗聴器が仕掛けられているかも知れないので話せない) と書いて見せてくれました。そして灰皿の上でその紙切れにライターで火をつけ燃やしました。彼は秘密警察 (KGB) から監視されていたのです。そのときソ連が Orwellian と表現される現実を肌で感じ、首筋がゾットしたことを思い出します。

#### 4. 『復讐鬼』の比喩表現: Ahab

『白鯨 (Moby-Dick)』は、メルヴィル (Herman Melville) の1851年の長編小説で、代表作といわれていますが、当時は世には評価されなかったようです。小説の前半で捕鯨の道具や技法の解説が詳細に長々と続くということも災いしたと思われます。

捕鯨船の船員となることを決めた語り手イシュメルは、Ahab 船長の捕鯨船ピーコッド号に乗り込むのです。エイハブ船長は、Moby-Dick と呼ばれる凶暴な白いマッコウクジラに片足を食われて義足となったことに復讐することを決意し、乗組員も白鯨に復讐することを決めるのです。エイハブ船長は、多様な人種からなる船員たちとの数年にわたる航海の末、遂にモービー・ディックと対決し、敗北死を遂げるのです。

For three years Chicago general manager Jerry Krause had pursued Toni Kukoc — three-time European Player of the Year and the Michael Jordan of Europe — with the zeal of Ahab. — *Newsweek*, October 18, 1993, p. 46

米プロバスケットチーム the Chicago Bulls の総監督 Jerry Krause は、ヨーロッパのマイケル・ジョーダンといわれている Toni Kukoc 選手の獲得を「エイハブ船長の執着心」で3年間ずっと追求めていたのです。ここでは復讐の意味はありませんが、「執拗な執着心」を表わすのに Ahab のメタファーを用いています。

During his first two years, Clinton blamed the entrenched Democratic leadership in Congress for dragging him under. He told his aides that he felt lashed “like Ahab to Moby Dick, with the same results.” — *Newsweek*, April 24, 1995, p. 22

クリントン大統領一期目の最初の2年間、彼は議会の慣例にどっぷりつかっている民主党指導部が自分を引きずり落とそうとしていると非難しました。彼は補佐官たちに、「モービー・ディックに挑んだエイハブ船長のように」打ちのめされ、船長と同じ

運命をたどるような感じがすると述べたのでした。

この直喩はエイハブ船長がモービー・ディックに片足を奪われたイメージをクリントンに投影しています。

I am beginning to understand how CIA counterintelligence whiz James Jesus Angleton felt during his obsessive Ahab-like hunt in the 1960s for a Soviet mole who had buried himself in the agency. — *Time*, January 29, 1996, p. 54

この論説の著者は、1960年代にCIAに潜り込んでいたソ連のスパイを対諜報活動の達人 Angleton が「エイハブ船長のような執念深い追跡」をした際、どのような気持ちだったかを、理解し始めているのです。

ここではスパイが二重スパイを見つけ出そうと血眼になって執念深く活動している様を、エイハブ船長の取り付かれた復讐心で比喩的に表現しています。

In a case with no clear winner, there was one undeniable loser — Judge Jackson. The court blasted him for “egregious” violations of the judicial-conduct canons, when he rattled on to the press while the case was pending, offering his opinion that Bill Gates had a “Napoleonic concept of himself and his company” and comparing Microsoft to a drug gang.

When the case lands back in district court, it will get a new judge. That’s good news for Microsoft, since Jackson’s pursuit of Gates was beginning to resemble Ahab’s pursuit of a certain whale. — *Time*, July 9, 2001, p. 27

この報道はマイクロソフトの基本ソフトの販売方法が、独占禁止法違反で提訴された事件についてのものです。担当の Jackson 判事は、この訴訟が未決定であるのに、マスコミにビル・ゲイツは自分と会社をナポレオンのように考えているとか、マイクロソフト社を麻薬一味にたとえたりする中傷を朗々と

述べたのでした。

ジャクソン判事のビル・ゲイツを目の仇にする執念深さを、エイハブ船長の鯨に対する復讐心に喩えているのです。

## 5. まとめ

現代英語のなかに小説にまつわるメタファーが現れますが、文学的に評価が高い小説もあればそうでないものもあります。しかし、これらの小説が多くの人に共有されているため、それらの小説に由来するメタファーがしばしば顔を出すでしょう。メタファーは複雑で説明が長引くような事象や内容を、共有された知識やイメージに訴え、端的に効率よく理解させてくれるからと思われまふ。例えば、メタファー Orwellian は「独裁者」という抽象的なイメージを、小説『1984』の発する警告とともに読者に具体的に理解させてくれるのです。

オーウェルの小説『1984』について、かつての米 CBS 局の人気特集番組 *20/20* (Twenty Twenty) で、当時の超人気キャスター Barbara Walter が最近のアメリカの高校生は民主主義のバイブルとも言うべきこの本を読んでいないことを嘆いたことがありました。アメリカ式民主主義の原点、すなわち、独裁政府に絶えず警戒をせよという警告がこの本に含まれているからなのです。

小説に由来するメタファーが現代英語のなかで現れるとき、その原典となっている小説の知識がなければその内容理解が十分といえなくなります。前々回の (II) (*CHART NETWORK No. 66*) で紹介したハーシュ (E. D. Hirsch) が主張するように、識字能力を高めるのには語彙や文法の知識だけでなく、文化的な識字能力 (cultural literacy) が重要となります。今回の小説も、すべてハーシュの *The Dictionary of Cultural Literacy* (1993) に取り上げられています。

文化的な識字能力は英語教師が英文を読み取る場合にも当てはまると思われます。英語圏で共有されている文化的な知識、つまり、文化常識は小説以外に数多くあり、それらを養うことは英文から正確な情報を読み取るために、語彙や文法と共に大切だと思います。

(元兵庫県立星陵高等学校教諭)